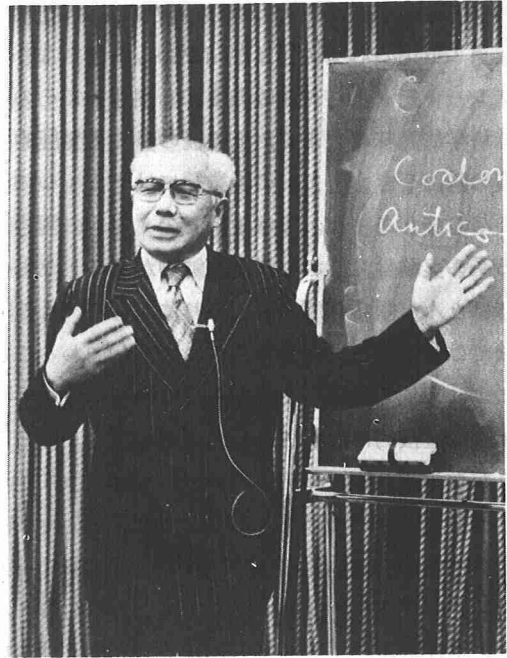


江上先生の思い出

酒 井 彦 一 (生化)

江上不二夫先生は、東京大学を昭和46年に退官されたあと、三菱化成生命科学研究所の初代所長として同研究所の設立とその発展に尽力された。一昨年、同所長を辞されてからは名誉所長として、又、52年からはオパーリンのあとを継がれた「国際生命の起源学会」会長として、多くの仕事を精力的に進められる御多忙な毎日をすごされ、同時に御自身の研究活動を依然として続けておられた。その先生が、昨年末より肺癌のため入院を繰り返され、遂に昭和57年7月17日、御逝去された。とても病気になられるような先生とは誰しも思っていなかっただけに、まことに痛恨に堪えない。生化学界は勿論、広く生物科学界はこゝに国際的な指導者を失い、その損失は計り知れないものがある。先生が日本の化学の偉大な指導者として、戦後の日本の生化学の発展に尽された貢献の大きさはあらためて云うまでもない。

先生が名古屋大学理学部化学教室から、昭和33年に東京大学理学部に新設された生物化学教室に移られてから、多くの若者達が先生の教室に集り、育ち、現在、国内外で活躍されている。それは、先生が常に若い学生達に学問の深遠な興味を湧き立たせ、又、研究上の壁につき当った悩める学生達を大いに勇気づける巧みさをお持ちだったからである。これは、先生に学問上の若さが人一倍みなぎっていたからに違いない。先生は、又、大変な読書家であり勉強家であられた。生物化学教室では、今でも図書室の野口さんが多くの新着ジャーナルの contents をコピーして、各研究室に配る習わしになっている。その青やきコピーが研究室に配られるやいなや、コピー片手に図書室に一番のりされるのは、常に不二夫先生であった。



大学紛争時代の先生は、問題解決のために常に先頭に立たれていた。「年寄りの僕がこんなに元気なのに、君達のように若い人がもっと元気を出さなくっちゃ」と、よくハッパをかけられたものである。先生は、又、仕事の切り替えが非常に早く上手な方であった。昭和43年には日本生化学会会長、昭和44年から4年間は日本学術会議会長の激戦にありながら、研究室内での研究指導、教室と理学部の多くの雑用を巧みにこなされたのは超人的でさえあった。

先生が東京大学を退官された数年後の或る日、三菱化成生命科学研究所に先生をお尋ねした折、同研究所について先生の例のユニークな弁舌をお聞きしたことがある。先生は、基礎科学と企業との連がりの問題点を指摘されたあと、御自身の研究室の研究内容を熱をこめて話され、最後に、

「ねえ君、多くの人は論文を書くのに80%しか物を云っていない。もったいないよ。僕はね、その残りの20%で論文がいくらでも書けるんだよ」と楽しそうに話しておられたのは、今でも一つの教訓として忘れずにいる。

多くの場合、私達は実験の計画を立て、ある予想をもって結果を待つ。予想された結果が出れば、やっぱりそうかと満足し、予想に反すればどこか実験方法、手段が間違っていなかったかと心配する。不二夫先生は、常に、こうなるだろうと思ってやってみて、そうならなかったら必ず喜ばれた。「期待がはずれたからこそ面白いんじゃないの。自然は期待よりも遥かに偉大なのだ」という研究上の心得は、先生が生物化学教室におられたとき、よく拝聴した言葉である。

楽道家としての先生は、いつも前だけを見て後悔されなかった。さあどうしようかと考えて、こうしようと思ったら、そのように常に前進することを信条としておられた。又、生み出すことの喜び、育て上げることの楽しみは、先生が常に持っておられた研究の心であった。それは、新しい小さな発見をしたときの喜びであり、それを段々と

人に見えない

山をみつけたら

いそいそ早くのぼりた

そんな山があつたらしら

人にも見える

山はのぼりた

たすべくけっりのぼりた

思わぬ花や小石もあるたらしら

たのしみながら

のぼりた

江上不二夫

大きな仕事にしてゆく楽しみである。

先生は多くの要職におられたし、国際的にも御多忙であられた。教育上の名著も多い。しかし、研究者としての先生の一面は、強い共感を私達に与えてくれる。先生が日頃好んでおられた言葉を、先生の直筆をお借りして、最後に掲げさせていただき、先生の御冥福を心からお祈りしたい。